

科目担当者氏名		科目担当者連絡先（メールアドレス）	
齋藤 雅哉			
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
浅川 達人		明治学院大学 社会学部 社会学科	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査実習	MJGa-140804-0	11人	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

実習生が、調査対象者を選定するところからすべてを担当した。その選択は、留学生から相撲部屋の親方や力士まで範囲は広い。また、対象者の出身国も、韓国や中国などの東アジアからアイルランド、アメリカ、イタリア、インド、エジプト、そして日本と多岐にわたる。このような幅の広さは、日本社会に暮らす「滞日外国人」の多様性をあらわしている。この意味での「多様性」は実習生が作成した報告書からみてとれる。ただし、対象者自身の生活スタイルについては、さらに踏み込んだ議論を展開する必要があったと考える。

II. 調査の企画・設計（デザイン）

1. 調査のテーマ／領域：

滞日外国人の生活スタイルから日本社会における多文化共生のあり方を問う

2. 調査の内容／概要：

多文化共生社会論やコミュニケーション論などを踏まえながら、滞日外国人の生活スタイルを掘り下げていくことで、「多文化共生社会」のあり方を考究する。

3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

実習生が、自身の問題関心から対象者を選択した。個別具体的に対象者を選択した実習生もいれば、実習生自身の問題関心を具体化するために訪れた場所で対象者と出会うこともあった。

4. 主な調査項目：

日本文化への関心、移住の理由、日本社会への（未）適応など。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：

実習生が、自らの問題関心をもとに、対象者に質問をおこなう聞き取り調査を採用した。あわせて、「語られたこと」に関する統計資料や文字資料などを収集した。

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

多くの実習生が、9月以降、東京近郊に住む滞日外国人を対象に各自でアポイントメントを取るところからはじめた。その後、対象者とのやり取りを断続的におこなった。

7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入）：

得られたデータの質には幅がある。ただし、これまで十分に焦点があてられてこなかった領域のデータを収集することが出来たと考える。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析／解釈の方法：

担当者が投げかけた「多文化共生はいかにして(不)可能か」という大きな問いを踏まえた上で、実習生が対象者とのやり取りのなかでデータの収集・データの分析・問題の構造化を同時並行的におこなう漸次構造化法を採用した。

9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

日本で暮らすことは、日本文化と自文化のどちらかを極端に選択することではない。たとえば、対象者は、実習生がテーマとした相撲・妖怪・書道などに興味を示す過程で、自らの暮らし方を何かしら編み直してきたことがあきらかになった。

10. 報告書刊行の予定と概要：

社会調査実習報告書Vol.31 2015年3月刊行